

メインストリーム（Mainstreamed Student Issues）

．カウンセラーシステムの概要

最初にカウンセラーは、専攻している学部によって異なるということである。カウンセラーは、聾学生を助けるサポートプログラムチームの一部として協力的に働いている。例えば、ビジネススクールでのノートテイキングや通訳のサービスを提供しているところの一部である。この部門は、学長的な人もいるし、チェアパーソン、アドバイザー、チューターがそれぞれの決まった学部にいる。そのほかにノートテイカーをコーディネートする人が一人いる。もちろんカウンセラーもいる。通訳は他の部とも一緒に働いているが、ここでは一人であり一緒ではない。私たちは1対1のカウンセリングサービスを行う。学習面でのカウンセリングを行う。職業カウンセリングも行う。新入学生と2年生がどのように専攻を決めていくのかのカウンセリングも行う。私たちは特定の学部に所属し、先生方のカウンセリングも担当したりする。

．メインストリームの学生の問題

これらがメインストリームに所属している学生の問題点である。これらは、アイデンティティの問題である、アイデンティティとは、「いったい自分は誰なんだ」というものである。コミュニケーションの問題もある。どのような積極性のある学習者になっていくのか、学習に対してどのように準備をしているのか。環境からくるプレッシャー、そして自分をサポートしていくことについて、自分の中でいかに作っていくのか、そして職業についての心配ごとや考えなければならないことなど、新入学生は、ほとんど考え方が若い、入学した段階では自分では何になりたいのかわかっているつもりでいる。しかし、学生生活を通してだんだんと年を重ねると自分は、将来何になりたいのかわからなくなってくる学生が多い。多くの学生は、アイデンティティの問題を抱えている学生が多い。メインストリームにいる学生の中には、自分がどのグループに属しているのかわからない。たとえば自分が聾のグループに所属しているのか、健聴学生のグループに属しているのか、あるいは口話を使って特定のグループに所属するのかなどである。こうしたことが新入生に多くみられる。

．学生の立場から

学生のクリストファです。私が育った環境というのは、聞こえる環境の中で、さらに聾プログラムをとっている学生もいる環境の中にいた。そのプログラムの中では、どのように話したらいいのか、スピーチセラピーなどあったりして、どのようにして聾の人たちと

話しをしていく中で、助けていったらいいのかということもプログラムの中で学んだ。はじめは、聾プログラムに入った。そのプログラムを行っている聾学校は、自分の家から遠かった。しかし、両親がいつも疲れている私を見て、大変だと思い聾プログラムをやめてメインストリームに移らせた。メインストリームの学校では、自分一人だけが聾の学生であった。メインストリームにいる間、すなわち大学に行く前まで、いっさい通訳やノートテイクもいかなかった。ずっと、口話で授業を受け手きた。常にひとりぼっちであった。もっともチャレンジしたのは、まわりに手話ができる人が誰もいなかったから、私自身も話すことを学ぶことをしなければならなかったし、自分が小さな時は、話すことができなかったが、メインストリームの学校で学ぶなかで、スピーチの言葉も伸びてきた。だから大学に入学するときには、聾の世界に戻ってきたいと感じていた。それで、RIT を選んだのである。なぜなら、RIT の環境は、聞こえる人と聾の人の両方がいる環境だったからです。ギャローデッド大学といった聾者だけの大学があることも知っていた。その大学に行きたいとは思わなかった。それは、私はずっと健聴学生と一緒に育ってきており、健聴学生と離れたくなかったという理由もあります。ここに来てからすぐ、単語の手話を覚えた。まわりの人たちは、私は、はじめ聾ではなく難聴学生だと思っていた。なぜなら聞こえることはきこえるが難聴の人よりは理解できない。私はずっと口話で育ってきているので、私がずっと難聴であると思っていた人たちが多かった。現在は補聴器をしているが、もし、はずしたらまったく聞こえない。したがって聾であると思っているし、それが自分のアイデンティティだと思っている。この大学では、ほとんど聾学生と遊んだり、つきあったりしている。私が思うに、難聴の学生は主に聞こえる人のグループと一緒に交流をしているように感じる。私は聾学生とも交流するし、健聴学生とも交流している。なぜならずっと聞こえる人たちと育っているからである。

メインストリームにいる多くの学生は、どこのグループにいるのかわからない人がいる。聾のグループでもないし、難聴のグループでもない、間を歩いている人が多く見られる。

ほかの問題は、まわりの人たちが聾の自分のことをどう思っているのかということである。私の立場が聾というグループで見られているのか、聾個人としてみられているのか。そのような問題が学生の中にはある。その他に起こり得る問題として、自分が聾の人のコミュニケーションと合っているのか、聾の人たちから自分がどう見られているのかなどもある。

私の場合、初めは手話ができなかったので、ASL（アメリカ手話）を使っている学生たちからは、グループに所属していないと思われていた。この学校に入学した新入学生のころの友達というのは、聾者であるけれども話すことができる、口話で話す人たちと交流をしていた。手話、ASL（アメリカ手話）を使う人たちとも交流をするようになった。

他に起こりうる問題は、先生が自分をどのようにみているのか、先生が自分の能力や個性を疑っているのではないか。自分のことをどう思っているのかという問題である。メインストリームにおいて、次に起きる問題は、コミュニケーションの問題である。同じメイ

ンストリームのクラスにいて、他の聞こえる学生とは少し壁がある。違ったグループにいるのではないが、実際に聞こえる人たちと参加できているのか、そのような問題がある。

もちろんクラスの中では、聾学生との方がうまくいく。それはコミュニケーションが簡単であるからである。しかし、時に聞こえる人と仕事をしたい、活動をしたいと思ったが、どうしてもコミュニケーションが、バリアになってしまっていてできないことがある。時には、聾の人を敬遠してしまう人がいる。彼らは、手話をつかうことができないため、聾者を嫌う。

これは、彼の好むトピックである。私のとっている学部は、めずらしい。エンジニアの学部には聾の学生が多くいるので、通訳を簡単に得ることができる。私のいる学部であるパブリックポリシーというところは、一人しか聾学生がいない。このため通訳もカバーできない。たとえば、パブリックポリシーの基本的な授業、パブリックポリシーの分析の仕方のベーシックな部分でも、聾者は一人しかいない。ここ学生には、1100人もの聾者がおり、通訳者がこれらの学生のすべての分野をカバーできるかということそれはできない。通訳者は、その学部の特殊語彙を知っていなければならないし、専門分野の知識がなければいけない。たとえば私がとっている経済のクラスで、もしアート関係の通訳者が経済関係の通訳をするとなったときには、それはできない。この単語は、手話ではどう表すのかが多くきいていかなければならない。したがって通訳者は、特定の得意の分野がなければならぬ。

ノートテイキングは、重要である。あるところでは、2時間でノンストップの講義があり、その時に依頼したノートテイクが書いたのは、たったの2ページだったということがある。それに対して、すごく驚いた。そしてなにがあったのか、コーディネータに話したことがある。ノートテイクは、大切である。それは、教員と学生が何を話して、学生が教員に何を質問したのか、それは試験にも関係してくる。

いろいろと問題があったと思われるがこのときに私は、カウンセラーのところに行った。その時にカウンセリングが、どのように回答をしてくれたのか。またどのように助けてくれたのが問題となる。

カウンセラーのもとにいき、何がおこったのかを説明する。カウンセラーは、ああいうことはやったの？こういうことはしたの？ということを引きいてくる。

Q：学生がカウンセラーのところに行ったとき、何かもしっくりいかないときに、その人はたとえばチュータとか、別のサービスのところに参照されたかどうか、他の場所に移されたかどうか、あるいはニーズにあう場所に紹介されたかどうか。

A：相談にいったカウンセラーが回答を出せない、手助けができないとき、他のカウンセラーのところにいき、話をしたり、またカウンセラーは、質問したいことに関しての自分の答えをもっている人たちを紹介したりということがあった。いままで、私が支援をもとめてきたときに、私のカウンセラーは、それに対して手助けをしてきた。もちろん彼がも

ってきた問題を解決できるわけではない。

Q：自分のアイデンティティを確立するときに、手話を使うとか、口話で話すことは問題にならなかったか。

A：高校時代のことですが、健聴学生と話しているとき、私は、口をよみとることができ
るが、自分をはっきり言いたいことを伝えることができなかったこともあった。たと
えば話し手が、くるりと背を向けてしまうと、何を言っているのかわからなかった。
手話をつかうようになってから、コミュニケーションの問題も徐々に解決するよう
になった。ただ外部の人たちにこういったことを、どうやって伝えていくのかは、重
要な問題である。RIT が好きで、手話を知らないひとでもいろいろと教えてくれる。外
部にこの重要性を知らせることは大切なことである。

Q：メインストリームから RIT に入った学生と、NTID の聾学生と違ったカウンセラーが
いるのか。それとも同じ人が担当するのか。カウンセラーの内容はちがうのか。

A：カウンセラーの内容は異なる。NTID に着目したカウンセラー、別の方は NTID をの
ぞいたカウンセラーである。NTID に属している学生、NTID 以外に属している学生な
ど両方ともに関わっている場合もある。